

清末の漢訳政治小説『累卵東洋』について ——明治政治小説『累卵の東洋』との比較を通して

寇 振鋒

1. はじめに

清末の漢訳政治小説『累卵東洋』は、明治の政治小説『累卵の東洋』の漢訳本である。『累卵の東洋』は、明治時代の小説家、紀行文家、出版業者である大橋乙羽の代表的な政治小説である。この小説の第一版は脱稿十年後の1898年11月に博文館より公刊され、二ヶ月足らずで三版まで刊行され、公刊後の二年間に、六版まで刊行された¹。漢訳本『累卵東洋』は1901年5月に東京で刊行された²。この小説は、柴四朗の『佳人之奇遇』と矢野龍溪の『経国美談』に続き、漢訳された明治日本の政治小説である。しかも、この漢訳本は、日本で刊行されたものとして、初めての洋装の単行本政治小説である。

この小説は、漢訳の段階において既に多くの人に知られており、待ち望まれていた³。出版された後には、中国国内にいる周作人などの同時代の若者の間で、広く読まれることとなった⁴。なお、漢訳本は発行直後に、梁啓超が日本で創刊した『清議報』第80冊に「累卵東洋告白」という広告が載り、第81冊以後ほぼ毎冊の「当館販売及び代理販売各書籍雑誌価格」表にも掲載された。また、「鉄血子」と署名した人は、『累卵東洋』のために「累卵東洋を読む」という詩を『清議報』第93冊に載せて、訳者や作品の寓意を高く評価している⁵。また、留学生によって日本で最初に発行された『訳書彙編』の第2期以後にも広告が掲載されている。そのために、漢訳本は当時の在日中国人の間や、国内の若者の間でも、その影響がかなり大きかったといえる。しかし、この小説の研究については、日本人学者中村忠行（敬称を略する。以下すべて同じ）が若干言及している以外に、ほとんどの研究者はこの小説に論及していない⁶。実際、漢訳本だけでなく、七版まで発行された原作に関する専門的な研究もされていない。

本論文では原作と漢訳本を比較して、両者の異同等を考察する。そのうえで、その導入上における関連の事実を明らかにする。とくに、近代日中文学の交流史の視座から見て、近代中国において導入された日本政治小説の一作品として、この小説に対する考察を行なう意義は大きいと思われる。

2. 著者大橋乙羽と原作政治小説『累卵の東洋』

著者大橋乙羽(1969～1901)は旧姓渡部、本名又太郎である。二十歳の時、処女作の小説『美人の倂』が『出羽新聞』に掲載された。最初の政治小説『霹靂一声』は、「昼間は事務に励精し、夜間筆を把て一部の政治的小説を草し、題して『霹靂一声』といふ」⁷のような創作過程であったという。この頃、『霹靂一声』に続いて『累卵の東洋』を著したという⁸。おそらく、『累卵の東洋』も『霹靂一声』と同じように、多忙な時期に完成させたのであろう。また、『累卵の東洋』の校閲を得るために石橋思案に寄せたことが、硯友社入社のかっかけとなった⁹。

1893年博文館館主の大橋佐平の目にとまり、尾崎紅葉を仲人として、佐平の長女時子と結婚して、大橋姓を名乗った。そして、博文館に入社後、十三雑誌を統合して三大雑誌『太陽』『少年世界』『文芸倶楽部』にまとめ、総支配人となり、近代日本出版文化史上の「最初の編集者」¹⁰と呼ばれることとなる。1898年にそれまで書いた小説、雑筆、紀行、史伝等を『累卵の東洋』『若菜籠』『千山万水』『名流談海』『花鳥集』の五冊にまとめて、博文館より私費出版した。これら五冊の作品は、世人に「貯金文学」(後述)と称された。

次に、英国のインド侵略から東洋は累卵の危きにあるという、憂国の政治小説『累卵の東洋』の概要を見ておこう。

茫々たる大海の海浜を、年のころ三十前後の一壮士がよろよろと歩いている。彼は少しの塩を取るため海岸に穴を掘って周囲に石を積んだ。英人の統治下のインドで、少しの塩を取るのも厳禁されるという時代にあって、壮士は国を憂う念に燃える。夜、壮士の帰来を待っていた一婦人と、故国の存亡を語る。男は主人公、智度で、女は妹の羅夢である。数日後、智度は再び海岸に来て塩を拾おうとしたところ、警吏に逮捕され、数罪の加重で死刑を宣告され、獄中で残虐な体刑を加えられた。その後、智度は夢の中で、美少女に摩伽陀国に誘われ、国王と、美術亡国論を語り合う。その夢が醒めたところ、監獄に火事が起こる。この混乱の中、顔面を覆っている一婦人に救出さ

れたが、婦人は追跡を避けるため、途中で智度と別れて逃げた。智度は翌日新聞記事を見て、救出してくれた婦人が逮捕されたことを知り、婦人が妹に似ていたために羅夢であると、その時、智度ははっと悟った。そして、インド安危のために、亡命して波斯国に入り、応援の事を確認した後に、智度は香港、上海、北京を経て西湖で老僧に出会う。この老僧は中国の歴史と現状の弊政を語る。それに老僧は、かつて老僧と西湖で心ゆくまで世を談じた日本の豪傑、日野基邦の身の上や抱負や日野基邦の吟じた「杞人所憂行」と題した長詩を智度に聞かせた。この話を聞き、智度は日野基邦を尋ねようとして僧衣に着替え、安南に赴いた。智度は山中で猛虎に襲われようとした途端に、日本刀を帯びた壮士に救われた。智度と壮士は、二人でしばらく視線を交わすという場面でこの小説は終わる。

3 . 訳者憂亜子と漢訳本政治小説『累卵東洋』の概要

漢訳本は1901年5月13日に東京の愛善社によって印刷され、同月20日に大房元太郎により発行された¹¹。訳者について、小説の内表紙には、「憂亜子」とされている。しかし、奥付の「訳者兼発行者」は、「大房元太郎」となっている。その理由は、「政治的または法律的な配慮によるものであろう」¹²と指摘されているように、迫害を避けようとするためであろう。もう一つは出版上での規定のためで、日本人の名前を偽ったのではないかと考えられる。また、奥付の記載によると、原作と同じように私費出版の可能性が高い。残念ながら、現時点で憂亜子の実名は、まだ不明である。しかし、憂亜子と大房元太郎が、同一人物であるとは十分考えられよう。

なお、『清議報』第83冊掲載の広告によると、憂亜子はまた、アメリカ人「法烏羅」の著書『男女交合新論』を漢訳したという。なお、同広告によれば、憂亜子はまた、梁啓超と羅普の共編『和文漢読法』を再版した。前述のように、『累卵東洋』の広告や販売価格も梁啓超の『清議報』に掲載されていた。それだけ、梁啓超との関係が深かったと考えられる。実名は明らかでないが、当時の訳者の思想は、梁啓超等の改良派思想に同情を寄せる者であると考えられる。なぜなら、『清議報』との深い関係がある理由以外に、改作された小説後半には、「大清は満州に興り、遼瀋に遷都して、もともとは関外の強国であった」とあり、義和団事件以降の記述も、「天子は変事に際し難を避けて逃れ、百官は跣で走る」としている。すなわち訳者は「大清」「天子」な

どの敬語を使って、満州族を貶していない。なお、小説の最後で、老僧が智度と別れを告げる際に、「拙僧は一世の豪傑の士と結束する為に、近いうちに行脚する。而して低俗な所謂新党、所謂時の英傑という者は、拙僧が穢れのように避けるものである。」と語る。つまり、小説全体から見ても、この「新党」は恐らく、満清政府を徹底的に打ち倒そうとする革命派を指すのであろう。以上のことから、訳者が皇帝を擁護して君主立憲政治を主張する梁啓超らの維新改良派に属していると考えられる。

また、訳者の身分は当時の留学生であった可能性が高い。1901年12月第100冊『清議報』の広告と1902年6月発行『訳書彙編』第2年第3期の広告によると、漢訳本は「訳書彙編社発行書目（既刊）」中に収められている。なお、1903年発行『日本明治維新百傑伝』巻末の「訳書彙編社出版及発行書目」にも加わっているという¹³。この訳書彙編社は、中国人留学生によって結成された日本書漢訳の団体であり、最も早く留学生の創刊した雑誌『訳書彙編』も刊行している。そして、初期の『訳書彙編』の「編輯兼印行者」は「坂崎斌」という日本人の名前を用いており、二年目から「胡英敏」としている¹⁴。

雑誌『訳書彙編』は1900年12月6日に東京で創刊されたことからすれば、訳書彙編社は1900年12月以前に成立していたはずである。漢訳本は1901年5月に刊行されたので、その書物となる過程において、訳書彙編社が一団体として若干の役割を果たしたのではないかと考えられる。『訳書彙編』によれば、第1、2期の訳書彙編社の所在地は、大房元太郎の住所と同じく「東京麹町区飯田町六丁目二十四番地」である。それに、第2期からは、雑誌の奥付に漢訳本の広告が掲載されている¹⁵。なお、『訳書彙編』の宗旨は、「東西各国政法の書物を採択し、期間を分けて訳載し、文明思想を国民に伝播することにつとめる」ことにある。憂亜子は小説中で、「原君」「原臣」の章、政体分類論、国家の性質、「米国独立檄文」「欧米自由格言」など（後述）を取り入れていることから、彼の考え方は『訳書彙編』の宗旨と一致するところがある。そのため、憂亜子は訳書彙編社の一員に属する人物である可能性が高いと考えられる。

また、『清議報』や『訳書彙編』に載せられた、在日留学生のもう一つの雑誌『国民報』創刊号の広告によれば、国民報社の所在地は『訳書彙編』と大房元太郎のものと一致し、三者が全く同じである¹⁶。そして、『国民報』第1期所載の「米国独立檄文」も、『累卵東洋』中の「米国独立檄文」と全く同じ

である。そのため、憂亜子は『訳書彙編』と『国民報』両雑誌の編集に携わっていた**戢翼翬**、雷奮、楊廷棟、楊蔭杭等の中の一人ではないかと推測できる。

以上は訳者に関する情況の推考である。次は漢訳本の概要を見ておこう。訳作は原作の段落を移動しており、最初にインドの歴史状況、及び英国の虐政が紹介されている。第19段前半までは、段落の移動のほかは、ほぼ忠実な訳であるので、小説の内容は変わっていない。第19段後半から改作された内容は次の通りである。

智度は、西湖の寺で一老僧に出会う。老僧は智度の素性を喝破し、数百言を費やして専制制度の弊害を語りかけた。老僧は黄宗羲を尊崇し、彼の『明夷待訪録』を座右の書としている。智度は何気なくそれをとって、「原君」と「原臣」を読んで、君臣の大義を理解する。老僧は更に各国の政体の諸相を語る。智度に対して、君主立憲政体は最も理想的な政体であるから、帰国してから実現に邁進すべきだと薦める。智度が中国積弱の原因を尋ねると、老僧は上海駐在の某国領事の口を通して、国民に国家思想のないことと、国家と朝廷の区別の分からないことにあると答え、アヘン戦争以来、列強に分割されようとしている危機を語る。そして、老僧は智度に「米国独立檄文」と「欧米自由格言」を送った。智度はそれを読んで悲憤の念で胸がいっぱいになる。老僧はインドが反抗したら、アジア諸国は必ず協力すると伝えた。そして、智度に同志を募るために、壮士の多い日本に行くことを薦めた。最後に、老僧も一世の豪傑を募るために行脚しようとして決心し、小船で遠く去った智度をじっと見送るところで、この漢訳本は終わる。

4. 『累卵の東洋』の漢訳及び導入上の理由

蘭陵氏は跋文中に、「前に公と東都の書肆を遊し、見かけた政治小説は数十乃至百種を下らない」¹⁷と言っていることから、この当時の日本の政治小説の数が少なくないことが分かる。それならば、どうしてこの大量の政治小説の中から『累卵の東洋』を選んで訳し、国内に導入したのか、その理由を考察してみよう。

まず、小説の題目のように、訳者は現実の中国が累卵の危うき状況にあることを深く実感し、小説中において英国に残酷に搾取されるインドの亡国の惨状によって国人を戒めるためであったと考えられる。つまり、中国にイン

ドの轍を踏ませないよう、国人に警告しようとしたのである。日清戦争以後の中国は、列強による半植民状態に陥っていた。憂亜子は改作された部分で、次のように指摘している。英国は長江の港、威海衛を、仏国は越南を、日本は高麗、台湾、琉球を、独国は膠州湾、山東を、露国は旅順、大連を租借地か属領にし、なお、義和団の乱で、八ヶ国連合軍は天津、北京を攻撃した。それと同時に、露国は東三省を占領し、インドの英軍のように、露軍が黒龍江での無辜虐殺の惨状を引き起こすなどという累卵の危きを述べている。憂亜子のような憂国の士は中国が危険きわまりない状態にあると充分実感していたからこそ、この小説を用いて国人に警戒心を高めさせようとしたのである。

次に、政治小説の力が強いと考えたことにある。憂亜子は「自序」で政治小説の力について、次のように評価している。

嗚呼！政治小説はどうしてただ尋常の学校、新聞社の効用のみであろうか？ 一体政治小説は其の思も様々に変化し、其の情けも深く、其の事も新奇であり、其の文も広がる。忽ち金剛神のように、忽ち菩薩のように、忽ち仙神のように、忽ち妖怪のように、忽ち英雄のように、忽ち子女になったりする。様々に奇相を現わし、人をして喜び、笑い、怒り、罵らせ、その悲しみ、愉しみは限りない。

引き続き、「正面きった議論」より政治小説は、「其の人を感動させるのも易く、其の人の心に染み込ませるのも深く、其の人を開化させるのも非凡であり、其れが人に普及させるのも広い。それをもって風俗習慣を改め、人心を激発する場合には、蓋し期せずしてそうなり、知らずに到達するものであって、英米仏は其の効果を収めたのである。」と、指摘している。また同時に、中国では、逆に「其の効果を上げることができるかどうか、今日に至っても、なおそれを知らない。」と認識している。

以上は、憂亜子が政治小説の効力の大きさ、及び其の人々を深く感動させる政治小説の芸術的感化力を高く評価してきたことを示す。後者の芸術的視野から政治小説を論じたこの時期は、中国近代小説論の嚆矢と言われる『新小説』創刊号上の梁啓超「小説と群治の関係を論ず」に比べて一年半も早かった。一方、憂亜子はまた、功利的角度から政治小説の役割を賞賛している。明治初期の日本は同じく民智が未開だったとしたうえで、日本の先覚者は、

「そこで相率いて政治小説を纂訳した。ほどなく、民智が開けて、文明が急に進む。国の権力は駸々として、ヨーロッパ諸大邦と拮抗するほどになる。それは政治小説の功ではないとは謂えない。」と、政治小説の日本での功績を高く評価した。日本のみならず、強国では政治小説ができてから、「而してついに国運を転換できるようになった。嗚呼！其の役割は非凡ではないか。英の議院政治、米と仏の民主政治は皆この道から離れるものではない。」と政治小説の功利性を評価している。これらは、政治的啓蒙宣伝の一つの手段として、この有効な政治小説を国内に導入する要因と考えられたであろう。

第三は、国民性の改造のためである。前述のように訳者は梁啓超との関係が深かったために、彼の影響も強かったと思われる。梁啓超は『佳人之奇遇』の漢訳序言「訳印政治小説序」において、「彼の米、英、独、仏、奥、伊、日本各国政界が日に進むのは、則ち政治小説の功が最も高い。英の名士某君曰く、小説は国民の魂である。」と評価している。政治小説を訳すのは、小説の力を借りて国民の魂を救い、引いては政治を改革して国を救うという、その効力を早くから認識していたためである。憂亜子は改作された部分において、国家思想のない、国家と朝廷の区別の分からない愚昧な国民を批判した。また、蘭陵氏は跋文中で、連合軍が北京に侵入し、中国が分割されようとしているにもかかわらず、「安逸を貪るのは元のままで、遊び戯れもたけなわのままである」と、国人の無頓着を批判し、そのうえで、国民の奴隷根性をも批判した。国民性の改造は当時の知識人にかなり広くあった共通認識であると考えられる。したがって、この小説の漢訳と導入は、国民性を改造する目的があったと思われる。

第四は、政治宣伝として利用しようとしたのではないかという点について言及したい。目前の功利を実現するために、直接に国民に政治思想を植付けなければならないと考え、憂亜子は専制反対、自由主張の思想を含んでいる「原君」「原臣」「国家の性質」「米国独立檄文」「欧米自由格言」などを丸ごとそのまま引用したのであろう。

最後に、原作小説の本文が 126 頁に対し、題字、序跋、新聞雑誌の書評などが、本文を凌ぎ、130 頁もある。こうした数多くの誉め言葉は、訳者にとって見逃されなかったのであろう。これらの良い評判は、漢訳のもう一つの理由となったと思われる。

以上の五点が、憂亜子が『累卵の東洋』を漢訳し、速やかに国内に導入した理由であると考えられる。

5. 原作と漢訳本における構成上の異同

蘭陵氏の跋によれば、「乙羽は東人である。その言葉の繁蕪なるもので、我が智識に役に立たないならば、直ちに削除し、それは、蓋し十の五六である。増益したものは、亦十の三四である」という。実作を見れば、原作の内容は頁で数えるならば、124 頁あり、そのうち漢訳本で取替えられたのは、31 頁である。比率で見れば、原作の約 75% は忠実に訳され、約 25% は取り替えられている。また、漢訳本の内容は、76 頁であり、37 頁までは忠実な訳で、その後は改作である。つまり、訳者によって取り替えられた内容は、削除された原作の内容より大幅に増やされているといえる。

中村の前掲論文によると、小説の改刪については、「本文には開巻第一章から大斧鉞が加へられてある」と指摘している。しかし、この指摘には二つの誤解が含まれている。第一点は、「第一章」の用語が適当でないと思われることである。なぜなら、小説は章で分けていると誤解されやすいが、実際は、原作でも訳作でも章に分けられることはなく、段落によって区切られているだけである。もう一点は、第 1 段から「大斧鉞が加へられてある」のではなく、第 1 段は訳作の第 5 段に移動していることである。

段落から見ると、原作は 27 段に分けられ、訳作は約 49 段に分けられる。原作第 19 段後半からは、すべて訳者によって取り替えられた。第 19 段前半までの改作は四箇所、省略は三箇所、誤訳は二箇所、増加は七箇所であることから考察すると、訳作はある程度の忠実な訳だと思われる。筆者の考察によれば、原作と訳作の段落分けは以下のように示すことができる。

原作段落	2	3	4	10	1	5	6	7	8,9	10	12	→
訳作段落	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	→
→	11	12	12	12	13	14	15	16	17	18	19	20-27
→	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	改作

この表を見れば分かるように、原作の第 8、9 段が短くて、これが訳作の第 9 段にまとめられている。第 10 段と第 12 段が長すぎて、漢訳の際にそれぞれ二段と四段に分けられた。その中に原作第 19 段前半は漢訳の第 22 段に当た

り、第19段後半以後はすべて改作された。なお、訳者は段落の配置において、深思熟慮のうえで移動を行ったように見られる。しかし、残念ながら、段落が移動されたことにより、原作冒頭の「突然に巧みさが起こる。初めに突兀として、牖を開けて秀嶺を見るような概妙がある」¹⁸という手法は、インドの状況の紹介以後にずれたので、漢訳本は冒頭に読者を引き付ける面において、多少欠けている。漢訳本の約75%は忠実な訳なので、小説性がなお強く見えるが、しかし最後はむりやりに思想宣伝の作品としてそれなりの内容を丸ごと取り入れたため、小説の芸術的な要素は下がったと思われる。

なお、原作の序、跋、評語、及び小説中の頭注は漢訳本の中ですべて省略された。原作中の中国の弊政の歴史を紹介すること、及び日本志士日野基邦のことは、改作された。日野基邦の吟じた七百字もある長詩「杞人所憂行」は「東洋建国策」を高唱するものであり、訳者にとって、「我が智識に役に立たない」無用の長物として改作された。すなわち、漢訳本の中には日野基邦が出てこない。そして、原作に比べると、訳作の方は、思想宣伝を更に重視し、特に改作された後半は功を焦った感じがする。但し、漢訳本の終りは、やはり原作の未来への展望の結びに戻っている。

6. 漢訳本における取替えの内容とその思想

漢訳本は原作中のインドの亡国の惨状、及び危機感をそのまま継承した。そのほか、憂亜子は「自序」にて、「これに政治家の言を増加する」と言うように、後半において主に六つの政治の言論によって原作を取り替えている。この六つの部分が取り入れられた理由を探ってみよう。

第一部分では、漢訳本は明末清初の考証学者黄宗羲著『明夷待訪録』中の「原君」「原臣」の二章の全文を引用する。黄宗羲はこの二章を通して古代君主の禪譲の伝説によって、後世の君主が天下を「一人一姓」の私有物として見るのを非難する。更に言えば、その中には封建君主の専制制度を攻撃した民主思想の色彩が現れている。この二章は清末に改革運動の気風が台頭するに及んで、政治宣伝の文章として、盛んに流布された。梁啓超は、後に発表した文章中で、「清初の学者は、みな〈致用〉を講じた。いわゆる〈経世の務〉がそれである。黄宗羲は、史学を根底としていたために、これを論じてとりわけ詳しい。その近代思想にもっとも影響を与えたものは、『明夷待訪録』である。」¹⁹と、高く評価している。実は改良派だけがその二章に目を向けたの

でなく、更に早く、孫文らの革命派も「原君」「原臣」の二章を宣伝の文章として利用していた。1895年、孫文が横浜に亡命して中国最初の革命結社「興中会」の支部を創設した際には、明の滅亡にあたって、満州軍が南下し、揚州を攻略した十日間、八十万の死者を出した当時の惨状の記録『揚州十日記』と、『明夷待訪録』中の「原君」「原臣」を取り出して、宣伝物として配布した²⁰。なお、譚嗣同、唐才常ら改良派は思想が最も急進的であった時期に『明夷待訪録』と『揚州十日記』などの書物を印刷し配布して、革命思想を宣伝した²¹。しかし、憂亜子は訳作において、「原君」と「原臣」だけを取りあげて、満州軍の残虐を述べる『揚州十日記』にまったく言及しなかったことから考えると、保皇の改良派に属することが分かる。したがって、憂亜子がこの二章を引用したのは、同じように専制制度に反対するためであったと考えられる。また、黄宗羲、及び『明夷待訪録』は後に、留学生陳天華の政治小説『獅子吼』、及び懷仁の政治小説『卢梭魂』等の小説にも取り入れられている²²。これは恐らく『累卵東洋』からの影響がかなりあったためと考えられる。

第二部分は、政体分類論である。漢訳本には、表の形で「君主政体、貴族政体、少数共主政体、民主政体、君民共主政体」という五つの政体を読者に紹介している。しかも、各国の例を取り上げて、五つの政体をかなり詳しく説明している。また、漢訳本刊行一年後、梁啓超は1902年5月『新民叢報』第8号において、「中国専制政治進化史」という文章を載せた。その文章において、五つの表で各学者の政体分類を引用した。その中で、「近儒オースティンの分類」は漢訳本中の政体分類とほぼ一致している。但し、梁啓超は簡単な紹介だけで、憂亜子は各政体の類型をかなり詳しく論じている。しかし、両者の出典は同じものに拠ると思われる。当時の中国において、古代から続いてきた政体は、専制政体のみである。ゆえに、政体分類論は、中国人の思考に未曾有なものである。なお、小説中で老僧が智度に君主立憲政体を推薦することから考えると、訳者は君主立憲政体に賛同すると見られる。しかも、憂亜子は小説中で、「政体を革命する者の参考に備えるためである」と指摘しているように、政体分類論は国人に紹介する目的によっているのであろう。

第三部分は、中国人には「国家思想の無し」という尾崎行雄の観点を取り入れる。尾崎は『支那処分案』中では、「支那人は、まだ国家の何者たるを知らず、焉んぞ国家思想あるを得ん。支那に在っては、朝廷は則ち国家にして、首都は則ち朝廷なり。(略)支那は古来朝名を以て、国名と為し、朝廷変ずれ

ば、即ち国名を改む。」²³と中国人に国家思想がないという致命的弱点を指摘している。そこで、この文章の訳者は、「朝廷を国家と為す一言は、確かに中国弱亡の最大の病原である」こと、及び中国人の「国家と朝廷の大別が分からない」ということを深く反省している。憂亜子は尾崎の論に刺激を受けて小説中で上海駐在の某国領事の口を借りて、中国人の「国家思想の無し」「国家と朝廷の区別が無し」ということが、中国の弱さの根源であると述べた。この目的は、国人の愛国心を喚起するためであると考えられる。

第四部分は、「国家の性質」である。この出典は現時点で不明であるが、日本書によったと考えられる。訳者はまた領事の口を借りて、「衆多之民、一定之疆域、政治之組織、共同之主義、独立主権」という国家の根本としての五つの性質を詳しく分析している。言外の意味は、中国に五つの性質を一日も早く持たせようとしたのであろう。

第五部分は、「米国独立檄文」を全文引用している。これは1901年5月10日『国民報』創刊号の「訳編」欄に掲載され、その十日後の5月20日に漢訳本に丸ごとそのまま引用された。これは訳者の列強を排斥しようとした独立意識であろう。この出典はまだ不明であるが、日本書籍からの重訳だと考えられる。

第六部分は、三十四人の欧米大家の「欧米自由格言」を列挙している。憂亜子は小説中で「米国独立檄文」と「欧米自由格言」を読んだ智度を悲憤で胸をいっぱいさせた。実は、それは中国人を悲憤させることを目的とするものである。その引用は作者の専制反対と自由を主張する思想の体现であろう。

取替えの内容は、主にこれまで述べてきた六つの部分である。これらの取り入れ、取替えの最も主要な理由は、翻訳途中において訳者が目前の功利を実現するために、やはり文明思想を含む、政治思想の宣伝は効果が早いと考えたためであろう。

7. おわりに

以上、『累卵の東洋』との比較を通して、漢訳本『累卵東洋』の訳者、漢訳及びその導入の理由などの関連事実を考察した。両者の比較を通して、漢訳本は翻案とはいえ、約75%が忠実な訳であり、その後に改作されたことが分かった。その改作の理由は、これまで考察してきたように、思想宣伝によっ

て目前の功利を求めるのが急であったためである。つまり、英国のインド侵略から中国が累卵の危うきにある、という憂国の政治小説『累卵東洋』は、警戒心を国人に十分持たせるためである。この小説を通して、インドの轍を踏ませないように、国人に目前の累卵の危うきを認識させるとともに、文明の思想を広めようとしたのであろう。しかも、引用全篇の内容から見れば、訳者は目前の功利を実現するために、この小説を政治思想の宣伝として国内に導入しようとしたと見られる。言わば、この小説は梁啓超の「小説救国」の呼びかけに応えたものと思われる。

日本から導入されたこの一作の政治小説は、主に功利的目的のためである。訳者が「自序」中で展開する論述は、大袈裟であったが、しかしそれは最も早く政治小説の芸術的感化力に論及した文章であろう。なお、一方、この小説は小説の地位の向上のためにも一定の役割を果たしたと考えられる。当時小説の地位の低かった中国で、この小説の導入は政治を重視する視点に基づいているとはいえ、小説の地位を高めるために、清末政治小説の流行のために、先頭に立った一作であろう。

注

- 1 なお、大橋乙羽死後の1901年7月に刊行された遺著『欧米小観』の巻末には、第七版の発行広告もある。本稿使用の底本は、奥付によれば1890年1月25日に刊行された、第六版発行である。
- 2 本稿使用の漢訳底本は、上海図書館所蔵の1901年5月東京で刊行されたものである。
- 3 憂亜子は「累卵東洋自序」にて、「既に友人は観ることを求めて、届いた手紙がいっぱい束ねられるほどで、早急に植字工に渡し、以って同志を満足させることにする。」とし、また、末尾の蘭陵氏の跋文には、「とうとう手紙での請求者が日に日に多くなって、早急に刊行を要する」とある。これらの証言から待ち望まれていたことが分かる。
- 4 『周作人日記』上冊（大象出版社 1996.12）は、1902年2月から1903年2月まで（旧暦）の間に、十一箇所がこの小説に言及している。この日記によると、当時の知識人胡韻仙、魯迅との付き合いもあった阮立夫等が、周作人のところから借りて読んだという。なお、1902年刊行の徐維則輯、顧燮光補輯の石印本『増版東西学書録』（『近代譯書目』北京図書館出版社 2003.10）にも、漢訳本『累卵東洋』の内容要約が入っている。
- 5 詩の大意は次のようなものである。「愛国にして熱心な憂亜子は、独立救時の書に心を入れ込む。その意気は勃発して天も阻み難きものがあり、支那にインド

- の轍を踏ませない。」
- 6 中村忠行「晩清に於ける文学改良運動」『国語国文』第21巻第1号 1951.12。しかし、中村論文の翻訳上の改削に関する指摘は、当たっていない。なお、訳者に対しても触れていない。その他、実藤恵秀は『中国人日本留学史』増補版（くろしお出版 1970.10）の中で、留学生の出版活動の角度から若干触れている。
 - 7 岸上操「大橋乙羽君」『欧米小観』博文館 1901.7。
 - 8 佐々木徹「大橋乙羽年譜」『硯友社文学集』筑摩書房 1969.1。
 - 9 注7と同じ。
 - 10 坪内祐三「編集者大橋乙羽」『雑誌『太陽』と国民文化の形成』鈴木貞美編、思文閣出版 2001.7。
 - 11 愛善社はまた、1903年に「大橋式羽」という日本人名を名乗った陳蝶仙の『胡雪岩外伝』を印刷している。
 - 12 前掲『中国人日本留学史』p306。
 - 13 注12と同じ。p263、264。
 - 14 叶再生『中国近代現代出版通史』華文出版社第1巻 2002.1p760。
 - 15 『訳書彙編』（影印版）台湾学生書局 1966.9。
 - 16 実際発行の住所は、「東京小石川区白山御殿町百十番地」であった。
 - 17 原文の「不下数十百種」は、管見によって「数十乃至百種を下らない」と解釈した。
 - 18 原文には、「突如起妙 起手突鶻、有開牖看秀嶺之概妙」という漢文頭注がある。
 - 19 梁啓超著小野和子訳『清代學術概論』平凡社 1974. 1p42。
 - 20 島田虔次「中国のルソー」『中国革命の先駆者たち』筑摩書房 1965.10 p124 参照。初出『思想』第435号 1960.9。
 - 21 注19と同じ。p270 参照。
 - 22 『獅子吼』は、1904年冬から1905年11月末までの間に作成され、『民報』第2～5、7～9号（1906年）に連載された。『盧梭魂』は懐仁編述で1905年に刊行した。
 - 23 尾崎行雄「支那人の国家思想」（『支那処分案』第2章第1節）『清議報』第24冊 1899.8。この本は日清戦争末期1895年に博文館より刊行された。原文は『尾崎行雄全集』第3巻（平凡社 1926.9）によった。